

「東京大停電」 電気が使えなくなる日 Tokyo Big Black Out

金田武司著：幻冬舎

今年9月6日、震度7の地震により北海道はほぼ全域で電力が止まるブラックアウトが発生した。日本でこのような事態が起きたのは初めてだが、ブラックアウトが生じるかもしれないという副題がついたこの本は、8月に出版されている。

本書では、冒頭に今年1月、東京電力の電力需要がひっ迫しあと1%で東京でも大停電が発生しかねない事態になっていたことを紹介。電力が足りなくなると次々に発電所が停止し、広域に停電が広がる情景から電力に関する問題を考えさせるスタイルをとっている。

日本では大正3年に本格的な電気事業の始まりとなる木曾川水力開発がスタートし、電気は新しい文化をもたらした。以後、火力発電の時代を経て、戦後は原子力が推進され電力の6割を供給するに及んだが、平成の今は、新エネルギーが飛躍的に普及しつつある。

しかし、電力需要は刻々と変化する。必要な時に発電してもらわなければ経済価値は半減する。ここが多くの新エネルギーの泣き所で、需要にあわせて供給ができなければ基幹電源が止まり、ブラックアウトが起こる。数%の新エネルギーを利用するために社会が大混乱するリスクをとるのは本末転倒といえるのではないだろうか。著者は行き過ぎた新エネルギーの普及に疑問を呈している。

今日、ネットワーク社会の致命的弱点は電気の供給が止まること。

2001年9月の同時多発テロをエネルギー問題とみなしたアメリカは脱中東の方策を考え、シェールガスの開発等に舵を切った。アメリカは自国でエネルギー源を確保する手段があるが、日本は自給手段がない。お金があっても石油が買えない事態が起きうることは世界の歴史が示している。

トランプ大統領は今年6月電力市場で競争力を失いかけている石炭火力や原子力発電を支援する緊急措置をDOEに命じている。これは安全保障の見地からエネルギーの選択肢を減らすべきではないとの判断によるものだそうだ。技術、人、経験など失ったものは二度と戻らない。日本のエネルギー政策を考えるうえで、多くの教訓をこの本は教えてくれている。

(シニアネットワーク 齋藤 隆)

エネルギーレビュー誌の書評欄 2018年11月号掲載